
Sky Blue

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sky Blue

【Nコード】

N7167A

【作者名】

御劔剣次

【あらすじ】

108ある世界のうちの一つ、37番目の世界「バイアラス」で展開する物語。ジークは、悲しみに満ちた過去を背負いながらも、今を生き抜く。そうさせるのは、仲間達と、自分に課せられた使命。

第一話 始まり beginning

俺は、夢を見た。ずっと昔の、懐かしく、そしてやさしいあの頃の夢を。

正面には、どこまでも続く草原。後ろを振り返れば、あの忌々しい軍部科学研究所がある。

常人にとってはいい夢じゃないかもしれない。だが、あの施設の前には彼女が居て、やさしく微笑んでこちらを見ている。

いつまでも、このままでもいたかった。この時が、永遠に続けばいいと思っていたあの頃……。手を伸ばせば、届きそうない

「ジーク……ジーク！ 起きてー！」

元気な少年の声が、少し広めの、白を基調とした室内に響いた。その声に反応してベッドに横たわっていた青年が目を覚ました。

「……騒がしいやつだ」

青年は頭を軽く掻き、ベッドから起き上がった。

「ジーク、依頼来たよー！ しかもマスター経由で！」

茶髪の少年はうれしそうに手にもった紙を、ジークと呼んだ青年に見せ付けるように振った。

「マスター経由か……報酬は高そうだな」

ジークは青い短髪を手で軽く整え、ベッドから立ち上がる。「見せる」

少年から紙を奪い取り、内容に目を通す。少年は期待を膨らませながらその様子を観察している。

「……そうか、わかった」

ジークは読みおわると紙を丸めて屑籠くすかごに投げた。紙は籠の縁に当たって中に落ちた。

「さっさと準備してこい、ハルバート」

少年にそう言い放つと、ジークはクローゼットに向かった。少年はジークの背中を一瞬見た後、部屋を出た。

「しかし、マスター経由で依頼が来るなんて珍しいな」

引き締まり、傷だらけの体を覆い隠すようにシャツを着て、上着を羽織る。

「何かあるのか……まあいいか」

上着のファスナーを閉め、クローゼットを閉じた。そしてクローゼットの隣の壁に掛けられている、刃渡り二メートルはある大剣を片手で持ち上げ、背中に密着させた。すると布が現われ、大剣を覆うとジークの上着に結び付いた。

「……」

ジークは一度机の上にある写真立てを見た後、部屋を後にした。写真立てにはジークの夢に出てきた女性の写真が入っていた。

「マスター経由の依頼ってのは本当なの？」

ジークが建物の中から出てきた瞬間に、金の長髪を後ろで器用にまとめ上げている女性が尋ねてきた。

「ああ、本当だ」

ジークは腰に手を当てて立っている。

「てことはー、報奨金は高いってこと？」

頭にゴーグルを付けた青い長髪の青年が、微笑みながら尋ねた。

「ああ、そうだ」

ジークは無表情にそう言うと、歩き始めた。

「さっさと行くぞ」

ハルバートと女性と青年はジークの後に続いていく。

円形になっている町の入り口付近に四人は来た。そこには何台かの馬車があった。

「うーまー！」

ハルバートは大きくて黒い生き物に駆け寄り、頭を撫で始めた。「馬車を借りたい」

ジークが馬車の近くにいた男性に言った。

「はいよ、少し待ってな」

立派な顎髭を貯えた男性は、馬に付けた紐を引っ張って馬車まで誘導した。馬車用の特殊な鞍の突起に馬車の接続部を装着させた。

「はい、じゃ、料金は1300G頂きます^{ゴールド}」

男性はそう言うと、腰から小型の機械を取り出した。これは『ペイキー』という機械で、この世界では財布の代わりである。

「わかった」

ジークもペイキーを出して、コードを伸ばして男性のペイキーと繋げる。そしてペイキーを操作してコードを外した。

「はい、確かに受け取りました。いつてらっしゃいませ」

ペイキーを腰に戻しながら男性は言った。ジークは軽く頭を下げた。

四人は自分の荷物を持って馬車に乗り込んだ。

馬車は爽快に走る。だが、馬車の中はそれほど揺れてはいない。

「ねージーク、いつ着くの？」

ハルバートが退屈そうにジークに尋ねる。だがジークは無視した。「んー、わりと近いから二時間くらいかな」

ジークの代わりにゴーグルの青年が答えた。

「うわーん！ 退屈で死ぬー！ ねえダイアン、なんとかならない？」

ハルバートはゴーグルの青年に尋ねた。

「そうだねー……お昼寝したらいいんじゃないかな？」
ダイアンと呼ばれた青年はそう言うと、横になった。

「えー、お昼寝ー！？ ……ねえジーク」

「寝てる、うるさい」

ハルバートが猫なで声で言うと、ジークは即答した。ハルバートはぶすつとした後、ダイアンの隣で丸くなった。

それから二時間がたち、地平線には太陽が沈みかけていた。

「……見えてきた」

ダイアンがつぶやく。ハルバートは馬車から身を乗り出して目的地を見た。

「ねえねえジーク、あれが『ホーマ』なの？」

ハルバートは馬車の進行方向にある村を指差しながら尋ねた。

「ああ」

ジークはそう答えながら目を細めた。村の様子を探るためだ。

「……魔獣が！」

ジークが見たものは、村の中を徘徊する魔獣と、その足元に転がっている死体だった。

「村が魔獣の襲撃を受けてる！？」

ハルバートが驚いたように言った。馬車に繋がれた馬が怯えだし、村の二百メートルほど手前で停止した。

「とにかく行くぞ！」

ジークは小さなバッグを腰に付けて馬車を飛び出す。三人もあわてて続いた。

村の中は悲惨な状態だった。あちこちには村人のものと思われる死体が転がっており、そのどれもが無残に引き裂かれていた。

「うえ……」

ハルバートはその様子を見て、わざとらしくつぶやいた。

「まだ生き残りがいるかもしれない。散開して探すぞ」

ジークがそう言うと、四人はうなずき、散った。ジークは道を真っすぐに進む。

「……生き残りはいないのか」

ジークは襲い掛かってきた魔獣を切り倒しながら辺りを見回す。だが、人がいる気配はまったく無かった。

「マスター経由の依頼だったんだが……報告書は『村は魔獣の襲撃を受け、すでに全滅していた』だな」

面倒臭そうにそうつぶやき、引き上げようとしたとき……。

「……声？」

ジークは甲高い女性の声を、微かながらに捉えた。

「生き残りか」

目を細め、駆け出す。視線の先には、魔獣達の塊が蠢うごいている。

SEE YOU NEXT

第二話 出会い encounter

「てやあ！」

魔獣の塊の中心には少女がいた。さらに、その小柄な身体には似つかわしくない大型の両手剣を振り回している。

「はあ！」

甲高い声で勇敢に魔獣へ切り掛かっていくが、数が違いすぎた。

「はあ……はあ……」

除々に押される少女。剣を構え直したその瞬間、後ろにいた魔獣が少女へ腕を振り下ろした。

「!?!」

少女は振り返り、自分に向かって振り下ろされる腕を見つめた。

「くっ！」

少女に魔獣の腕が当たるか当たらないかの瞬間、少女から見る世界が回った。何事か理解しようと、自分を抱き抱える人物を見た。

「低級魔獣か……」

少女を両腕に抱えている人物は小さくつぶやくと、近づいてきた魔獣を一匹蹴り飛ばした。

「あ、あの……」

少女は抱かれながら声を出した。その人物はその声に反応した。

「ここなら大丈夫だろう」

おもむろに少女を降ろした。

「ありがとうございます」

少女はぺこりと頭を下げた。しかし、目の前に立つ青年はそれを無視した。

「低級魔獣だけか」

青年は背中に付けた大剣の柄に手を掛けた。すぐに紐が消え、大剣を覆っていた帯が消えて、青年は大剣を片手で構える。

「……面倒だな」

青年は少女をかばうように立ち、襲い来る魔獣達を睨み付けた。

「あの、お名前は？」

「ジーク」

唐突に尋ねてきた少女に、短く答えるジーク。少女は剣を握り直す。ジークの隣に並んだ。

「私はニーナです。私も戦います！」

ジークは驚き、ニーナという少女の顔を見た。

「……仕方ない。自分の身くらいは守れるな？」

ジークが尋ねると、少女は軽くうなずいた。

「ねえエミリー、あっちのほうから何か聞こえてこない？」

ダイアンが金髪の女性の方を向いて尋ねた。

「馬鹿っ！ それどころじゃないでしょ！」

エミリーと呼ばれた女性はダイアンに向かって叫んだ。

エミリーの言う通り、離れた所の音を気にしていられるほどの状況ではなかった。

何十匹にも及ぶ魔獣たちが、牙をむき出しにしてダイアン達を囲んでいる。ダイアンとエミリーは背中合わせに立ち、それぞれ戦闘態勢を取っている。

「で、どうするの？」

エミリーが背中にいるダイアンに尋ねた。ダイアンは微笑みで返した。

「はぁ……やるしかないわけね」

面倒臭そうにつぶやくと、視線を魔獣達に戻した。

「あ、エミリーは休んでてもいいよ。これくらいなら僕にも出来るから」

ダイアンはそう言って両手を上に向けて伸ばした。すると上空に光の雲が現われ、たちまちに大きくなった。

「ソードレイン！」

ダイアンが明るく高めの声で言うと、光の雲から、白く輝く剣が魔獣達目がけて降り注ぐ。それはまるで光の雨が降り注いでいるかのように幻想的な風景だった。

「完了」 はやくジークやハルバードと合流しよ

ダイアンはそう言ってニッコリと笑い、歩きだした。エミリーは倒れている魔獣達を見回すと、ダイアンを追い掛けた。

「はあ…… はあ…… 信じられない……」

ニーナは地面に尻餅を付き、小さくつぶやいた。

「あれだけの魔獣を、一人で、しかもこんな短時間で……」

ニーナの見つめる先には、ジークただ一人が立っていた。

ジークは無言で剣を背中に戻し、ニーナへ歩み寄った。目の前で来たジークに対し、少し怯えた様子で縮こまった。

「……」

ジークはその様子を見て、一度深く目を瞑り、そのまま後ろを向いて歩きだした。

「おい！ ジークー！」

ちょうどその時、ハルバードがジークの正面から走ってきた。

「どうだった」

自分の目の前で止まったハルバードにジークは尋ねた。

「うーんダメダメ。みーんな死んじゃった」

ハルバードは少しだけ悲しそうに言うと、すぐに笑顔に戻った。

「……そうか」

ジークは冷たく言い放つと歩き始めた。ハルバードがその後にく。

「あ、あの……」

その後ろ姿にニーナが声を掛ける。二人は立ち止まり、ハルバードだけが振り返った。

「ありがとうございます」
二人に聞こえるか聞こえないかの声で言った。ジークは何も言わずに、再び歩き始めた。

「あ、ジークウ」

ダイアンはジークの姿を見つけると、微笑みながら手を振った。その様子は外見に似合わず、幼さを伴っていた。

「どうだった」

ジークがダイアンに尋ねた。ダイアンは首を横に振った。

「そうか……。帰るぞ」

ジークは表情一つ変えずに言い放つと、馬車に向かって行った。三人もジークに続いた。

その四人の背中を静かに見送るニーナ。

SEE YOU NEXT

依頼 depend

まだまだ届かない。彼女はまだ先だ。

いくら手を伸ばしても、いくら体を前に倒しても、決して届くことはない。

そんなことはわかってる。

わかっているからこそ、余計に手を伸ばす。自分でもおかしいと思う

「ジークウ、退屈」

ハルバートがリビングの床を転がりながら言った。ジークは足元に転がってきたハルバートを踏んで止める。

「うるさい」

「わかったわかった！ 静かにするから足どげでー！」

ジークは苦しがるハルバートから足を離し、ソファアに座った。ハルバートは腹部を押さえて悶絶している。

「はいジーク、コーヒー」

ダイアンがテーブルの上に、コーヒー入りのティーカップを置いた。

「ああ」

短く答えると、ジークはコーヒーを口にした。

「なんか依頼来ないねえ」

雑誌を手に取り、椅子に座りながらダイアンがつぶやいた。一週間前のマスターからの依頼の後、まったく依頼がなかったのだ。

「休暇だと思えばいい」

低く、そして冷たくジークが言う。ダイアンはいつもの微笑みでその言葉を受けた。

静かに流れる時間。

ハルバートはいつの間にか寝息を立て、ダイアンは雑誌を読み、ジークはコーヒーを静かにすする。

「……エミリーはどうした？」

ジークはコーヒーを飲み干し、気になっていたことを尋ねた。

「お買物がデートだと思う」

ダイアンは雑誌から目を離す事無く答える。それを聞いたはずのジークはまったく反応せず、カップを台所へと運んだ。

そんな静かな空間に、高めのアラームが響いた。三人はすばやく音の発生源を見た。ジークはカップを置くと、静かに音の主へ迎う音を発している通信機を手に取り、通話ボタンを押す。

「依頼か？」

「ストレートね。そうよ」

通信機のスピーカーから女性の声が聞こえた。ハルバートがすばやく反応し、ジークの元に移動する。

『依頼内容は要人の護衛。依頼主は、今うちの紹介所にいるわ。すぐに来てちょうだい』

通信機の向こうの女性は言い終わると通信を切った。

「依頼！？ 依頼！？」

ハルバートがジークに詰め寄る。その目はうれしさと期待で輝いていた。

「……そうだ。さっさと準備しろ。すぐに出発する」

ジークはそう言い放つと、この屋敷の二階へ上がった。ジーク達の個人部屋はすべて二階にあるため、ジークに続いて、ダイアンとハルバートも二階へと上がる。

〈数十分前〉

「はい、いらっしやいませー!」

町の『紹介所』と呼ばれる施設。なにか困ったことがあり、それを解決してもらおうとする人が来るところ。そして依頼という形でそれを、もつとも最適だと思われる、または依頼主が指名したチームに回すのである。

要するに、文字通り紹介するということである。

「今日はどういったご用件でこちらに?」

円い眼鏡をかけた、店員らしき女性が、紹介所に入ってきた男性に尋ねた。男性は所内を軽く見回したあと、店員の元へ歩み寄った。「えっと、あの……ここは依頼を聞いてくれるところだと聞いてきたんですが……」

男性がオロオロと尋ねる。

「ええ、そうですね? ……まさか、知らないんですか?」

店員が不思議そうに尋ねると、男性はうなずいた。すると店員はニツコリと笑った。

「では、依頼の仕方についてから説明させていただきます! 依頼を、我々紹介所の者に申しして下さい。そうしたら次は、指名したいチームをお教えてください。ない場合は、我々が責任を持って、適任のチームを選ばせていただきます」

「あの……チームって、何ですか?」

男性が、恐る恐るといった様子で尋ねる。

「ではチームについて説明させていただきます! チームとは、依頼を、あなたに代わって達成させてくれる、いわゆるスペシャリスト達の集まりです」

店員は手短かに話し終わると、一枚の紙をカウンターの上に置いた。「それでは改めて、どういったご依頼ですか?」

ニツコリと笑う店員を見て、緊張か解けてきたのか、男性は少し笑顔になる。

「えっと、護送の依頼なんですけど、護送して欲しい人物は……」
「ストップです！」

最後まで言い掛けた男性を、店員が止めた。「そういう重要な情報、依頼を頼むチーム以外に明かしてはいけません」

指を左右に揺らしながら店員が言う。男性なるほどとうなずくと、店員はカウンターに置かれた紙を、男性の前まで滑らせた。

「それでは、依頼したいチームをお選びください……て、どのチームがいいのかよくわかりませんよね。こちらで、要人護衛に最適と思われるチームを選出しておきますね」

「あ、あの……」

紙を片付けて、店の奥へ行こうとした店員を、男性が呼び止める。「ジークという方がいるチームは、ありますか？」

男性が恐る恐る聞くと、店員はニッコリと笑い、通信機を手にとった。

「バーバラさん、至急『ツヴァイト』を呼び寄せてください。彼らに要人護衛の依頼が来ました」

店員はそう言うと、通信機の電源を切る。

「そちらのソファアでお待ちください」

男性は、店員の言うことにしたがって、ソファアに腰掛けた。

「依頼ー！」

紹介所に一番に飛び込んだハルバートは、直ぐ様カウンターに向かった。

「依っ頼、依っ頼！」

「あら、ハルバートくん、早いわね。ご褒美に飴あげる」

店員はニッコリと笑いながら、カウンターの下から飴を取り出す。ハルバートはその飴を受け取り、口にほうばった。

「ほれへ、いらいふひは？」

飴玉を五、六個口にほうばりながらハルバートが尋ねた。舌がう

まく動かせないために、おかしなしゃべり方になったが、店員はきちんと理解しているようだ。

「そのソファアに座ってるわよ」

店員は言葉だけで説明したが、ハルバートは後ろのソファアに視線を移す。ハルバートの視線の先には、驚いた表情の依頼主がいた。「こ、子供？」

男性がそうつぶやくと、ハルバートは眉間にしわを寄せて、人差し指を突き出した。

「こころもらからっけ、あかにふんなよ！」

飴玉を口いっぱいにはうばったままのハルバートが言った。男性は何を言っているのか理解できず、首を傾げる。

「えっとですね、『子供だからってばかにするなよ！』って言ってます」

店員がハルバートを真似て、眉間にしわを寄せ、人差し指を突き出して言う。男性はその仕草を見て、思わず苦笑いした。

「っと。ジークさん、こんにちわ！」

店員があわてた様子で入り口を向いたので、男性もそちらに視線を向けた。そこには、所有者の背丈と同じくらいの刃渡りをもった大剣を、背中に装備した青年が立っていた。

「間違いない、ターゲットだ……」

男性は、誰にも聞こえないような、小さな声でつぶやいた。

SEE YOU NEXT

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7167a/>

Sky Blue

2010年10月22日11時10分発行